

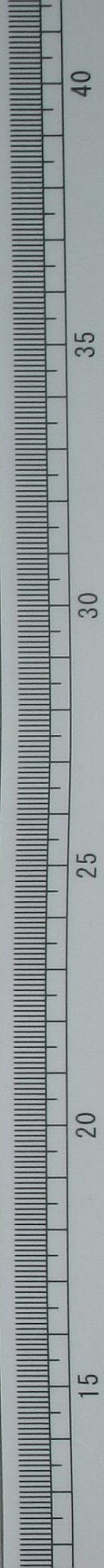
扶桑
第一産

養蠶うなぎ
秘録ひらく

上



原田織維文庫
文庫 4
659
1



4
659
1



養蠶秘錄序

五畝之宅樹之以桑者古先聖王所以安養斯民之制也夫桑蠶之有益于民其功固大故自古至今殖養之者尤多矣然不精知所以殖養之法則不能為其用也吾國養父郡藏垣村之里正上垣守國有慨乎此以奧

厚田織文庫

昭和三年十月二十九日
第一商學部より移管

養蠶秘錄

易之蠶甲^{タル}於諸國向者不遠千里而往淹留多日察其水土之宜學其殖^テ粮之法而歸鄉以氣多郡納屋村之水濱與奧州之壤地相似^{タル}構^甲居於其地以其所學之法殖桑養蠶共能繁殖因造蠶種以販于國中^ニ人皆以為良種也於是和漢桑蠶之權輿及其

殖養之法見諸書者所親聞見者編彙輯錄以為三卷名曰養蠶秘錄欲以公于世使眾人精知其法也示予需序余見而喜四方之國養蠶之地人雖已知其法苟回此書而極其工之密則可益無疎漏未養蠶之地人雖未知其法苟亦因此書而求其工

之法則可能成調理可謂兩得焉然
 則絹繒綿絲之廣適于世用豈不多
 於前日乎亦助王政流澤之一端也
 頃日刺成為書卷首以還之云
 享和二壬戌年孟春

出石文學櫻井篤忠識



養序ノ貳

凡例

一此書之裁多采舊卷之原由故事等之新傳史冊小
 擬之輯録予懐身を加ふてあふて古中を遠
 學阿は是を訂す本朝卷神の傳記を神代の
 卷を證し且神道者流の傳説を傳記に記す亦卷
 卷之法は多手法(回)歴(三)拙を攷重ふ口授を
 需めぬが採み不利を除き宣宗(某)旦婦女
 又易かん為画(圖)類(類)と卷中(圖)説(説)童(童)業(業)の

不諱と又蚕の字の音悉ふと蚯蚓の俗用ひそ
 登の字とすも他とて誤り用とて漁一龍
 信と通ふ能い皆はく倣へ得先と演と安とすも
 高難を要とすに至業此書不持ふ家と其の
 益あるを覽者杜撰と晒とふとくうと也

但州大屋

享味壬戌秋八月

上垣守國識

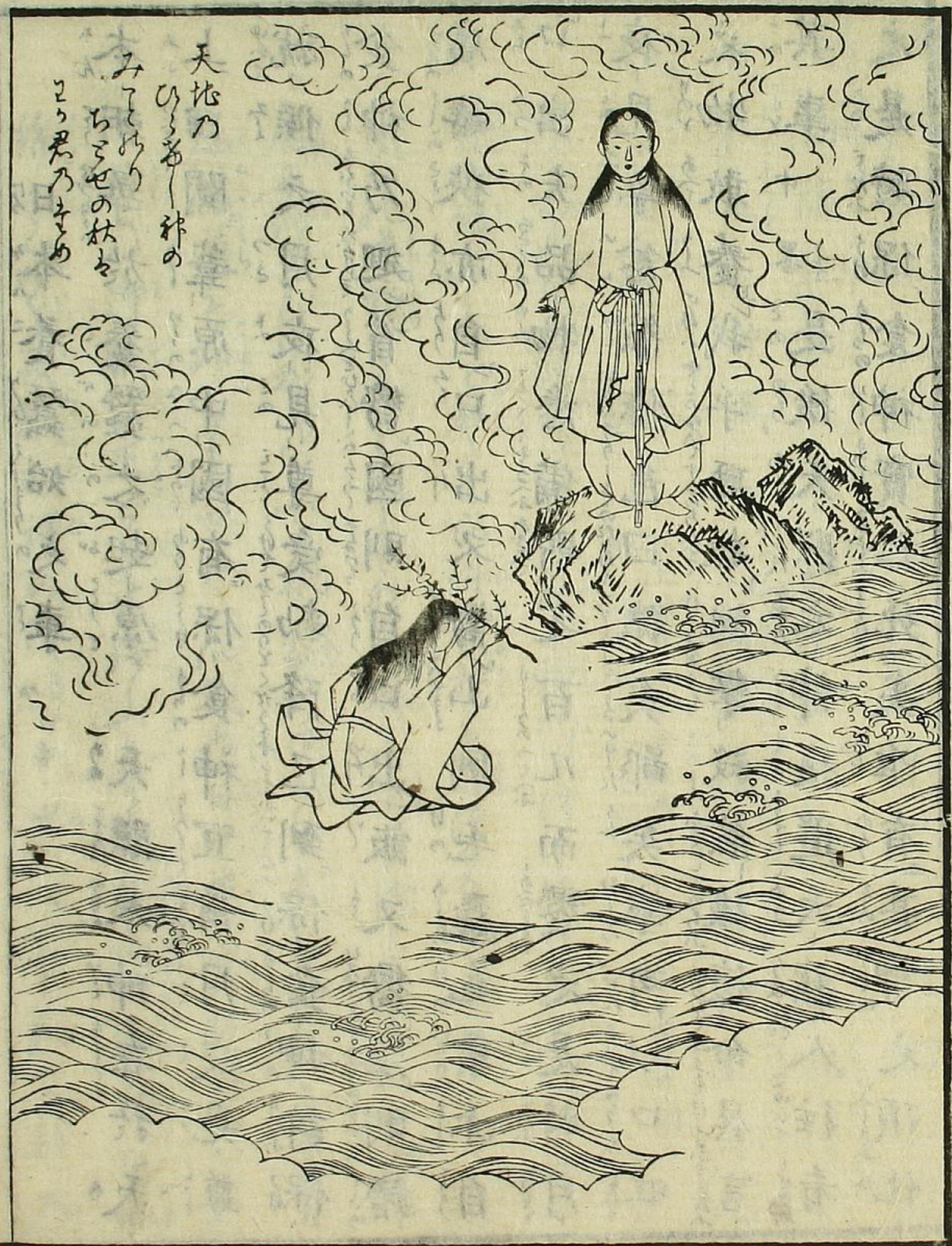


養蠶九例

養蠶秘録上卷

目錄

- 日本蠶始まれば
- 中華蚕始まれば 附 晋揚泉蠶賦之解
- 蚕の異名并蚕數品あり
- 天皇霖異大王は 附 蚕居起異名之事
- 蚕連見様の事
- 日毒忌れ事 并 貯振の事
- 日寒水小漬は
- 桑の植植振れ事
- 桑と地とて益ある事



天地乃
 ひろき 神の
 みこしゆり
 ちよせの林と
 こころ乃きよめ

桑接木仕振の事

日取本仕振の事

日興送りれ事 糸の病除ふ事

廻蚕依道具乃図解

蚕小波のきくうらぶ事

蚕連糸蚕小波の用をきく事 附り 嵐を防ぐ事

蚕毒忌の事

善蚕家造り仕振并 蚕安否悪乃事

日本養蠶始之事

本朝尋於養蠶之起原 天照太神在於天
上日聞葦原中國有保食神宜爾月夜見尊
就候之月夜見尊受勅降已到保食神許保
食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海則鱸
廣鱸狹亦自口出又嚮山則毛麤毛柔亦自
口出夫品物悉備貯之百几而饗之是時月
夜見尊忿然作色曰穢矣鄙矣寧可以口吐
之物敢養我乎迺拔劍擊殺然後復命具言
其事 中畧 是後天照太神復遣天熊人往看
之是時保食神實已死矣唯有其神之頂化

養蠶上之壹

為牛馬顛上生粟眉上生蠶眼中生禰腹中
生稻陰生麥及大豆小豆天熊人悉取持去
而奉進之 中畧 又口裏含蠶便得抽絲自此
始有養蠶之道云々 以上神代卷取要此章ハ人事ヲ以テ造化ヲ明ス
天人唯一神教仰モ餘アリ

かくあれは書蚕此道と既小神代は下り稚産靈日神
蚕城知ふとらと教ふちの保食神と眉はらりまし句て糸
かく此道始とありしやねん眉小生む所とはまの蚕此
眉小似まはかりしやねん蚕の口より糸を吐くを見く
絲操道を始とせしやねん又推日女尊齋服殿小はし
て神乃御服成主とせしやねんとや故小此神神を絲
綿とて夜衣服加護の御神也崇先也又神乃

龍雷神人幸人秘訣云

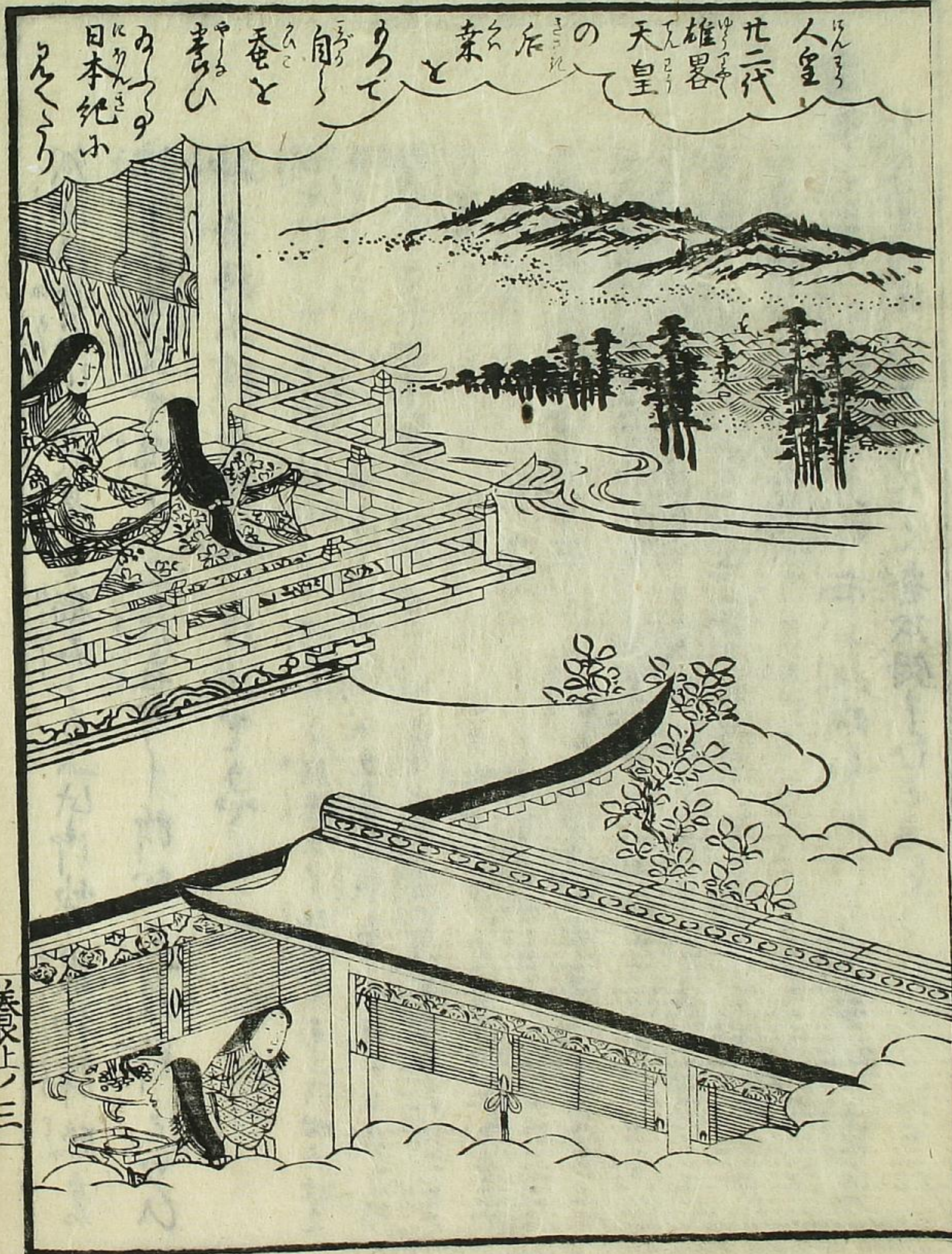
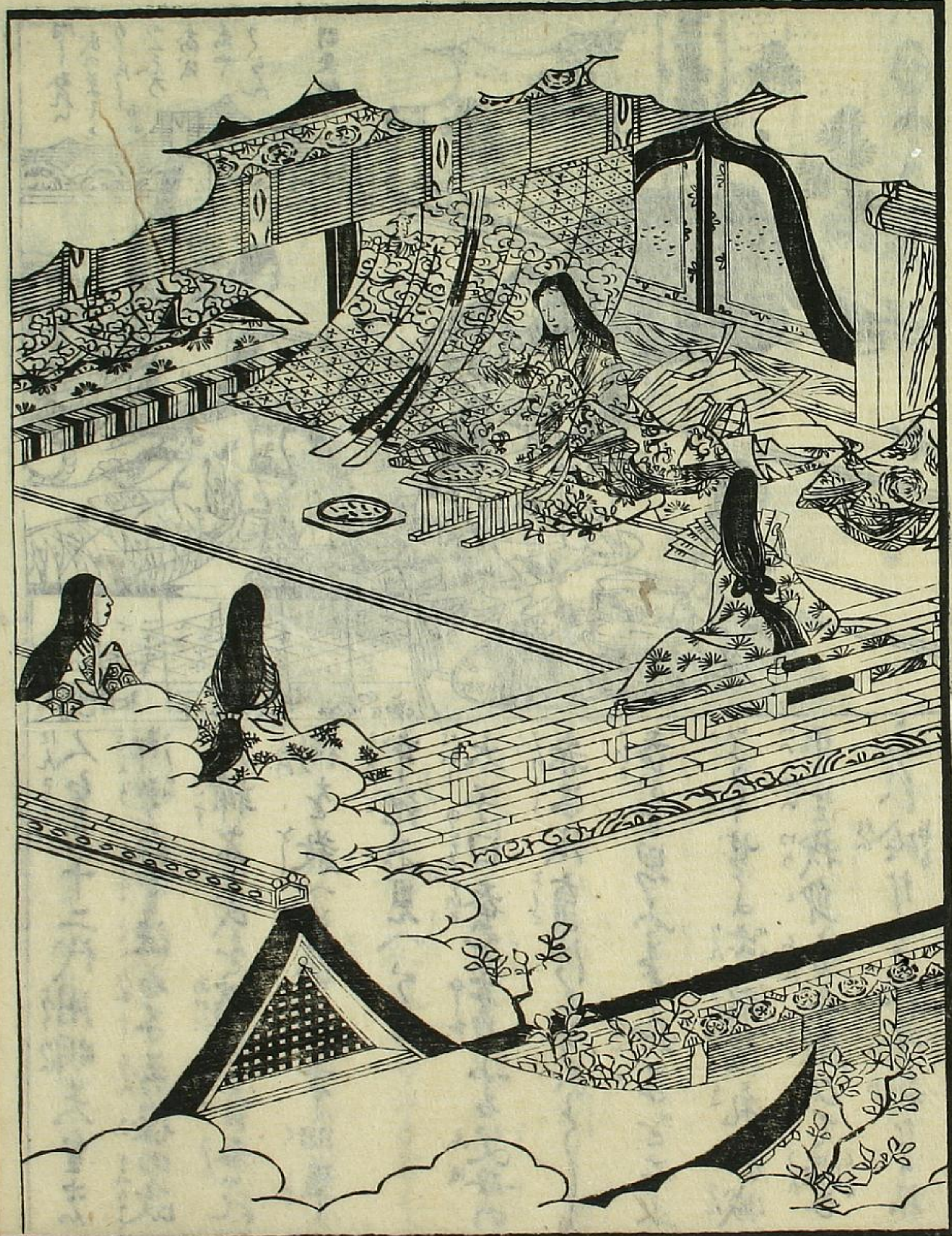
淨教なり此を織殿へも不淨此を事と甚忌嫌なり
保食神の古跡を日向の國志あり元來五穀此靈神
淨食津小浦一ませば何國小も育らん其炳焉と傳ふ
但馬國小鎮在り白赤養父大明神なり初めを水長初先て大時神と号
養父寄つ所小垂跡一の農器を製一の所を狭屋
とふ新墾の所或土平とふ今土田八本の出来一亦を
兼地とふ蚕此絲を尋せ給ふ所を糸井の郷といふ此
の頂上に牛馬生たりと傳ふ此亦や但馬と日本一の
牛を養ふ所なり又此社を善籠の淨神形果とて
國中の民絲綿を初穂やして持布祈禱なり此
宜なり又廣前此小石を戴さゆりて蚕の儀小並て前

養食上ノ二

狐除守護といは是を猫石といふは淨神最初降臨
地と大養父中辨一二月在せし新張三月野といふ
神去給ふ所を大塚といふ也

因云は淨神を狼狐使令とて給ふ也小猿麻少く他物狐ありは時此社
殆ど他守の淨蚕と傳ゆり田畑の例も立處は狼ありて守るを猿麻也
相狐ありさば其幸深く蚕を仰細きば狼も立去ゆり又糸結のそ
狼をけしはゆらんことを輕い其人の後小流を流す半ありて人の知る所
にして農業と守りせ給ふ靈物也又月形建聖屋といふ所も在り
大明神といふ天懸之神なり其末社小天村君社澳津彦命澳津姫命ありけ
神と者猿狐教の淨神なりは多るも宜なり又丹後國うらりの此里を始め
大神又淨蚕糸の地也丹波但馬ともえり一玉之後世を玉と名け民蚕業成い
絹と織て産物なり又丹波大系神社を伴許丹波と名けたり又丹波の神なり
人多く傳ふ小石と戴き前除猫石といふ古くは「大系」といふ向の猫控い

舊事本記云 天孫棟令の姉市千魂姫命狐以て天養媛と定先
天豊岡宮冥糸とめりて蚕成飼いむと云々



天皇 雄略 北代 人皇
 の 天 皇 雄 略 北 代 人 皇
 素 丹 自 然 蚕 糸 孝 行
 日本紀小 足くさり

養上ノ三



陽幸成爲一皇叔同
 なく精力を流るる
 朽へあし
 古比賢王惠る成爲世り
 たは路ひ民の老を判し
 妃みびり桑と掃を書蚕
 の道と婦人此業る事と
 稀しのみ貴れ御身はふ
 かくせよあまの況志をい
 の者よやりのを勵む勢先
 ぞむは有るるるさふ事あり



副長朝臣
 時あれ
 氏の手
 りの
 めんろ
 高成
 高や
 うらん

人皇三十二代用明天皇
 御宇に聖徳太子弟操の政
 成輔布民を憐れ書蚕此
 術を教へ給ひ一車
 中記小見へり
 太子曰蚕と書りやる父母の
 赤子成育はふあま
 蚕を思ふ事我子とる
 せよと書る陽氣の加減
 平生我身分不傲ひて温
 らん冷たりは平和なる根

中華蠶始于此

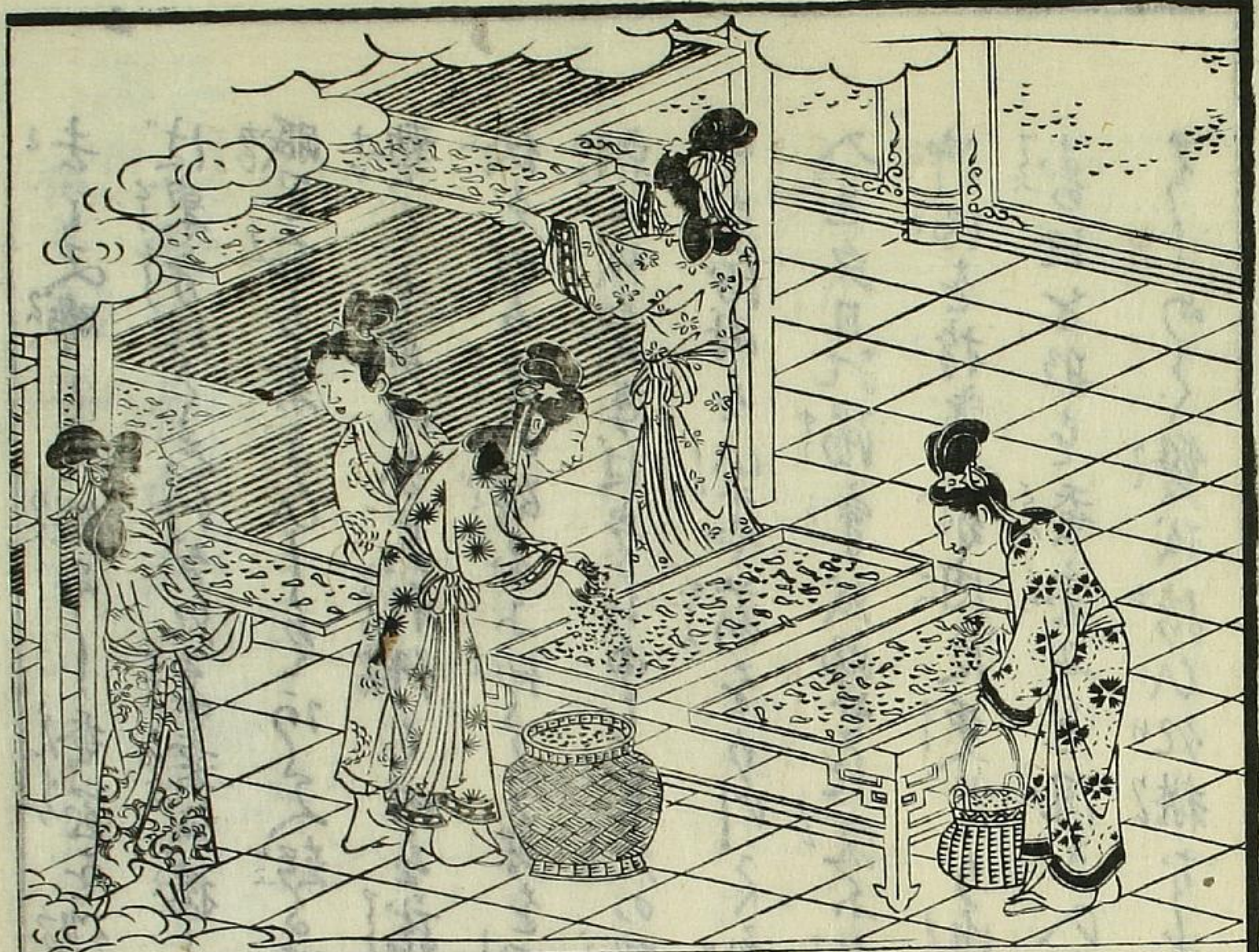
中華に之を伏羲氏の時始く蚕此絲を乃たしとや又淮南王の蠶經に元妃西陵氏は之を桑採りて飼蚕と

禮記月令云

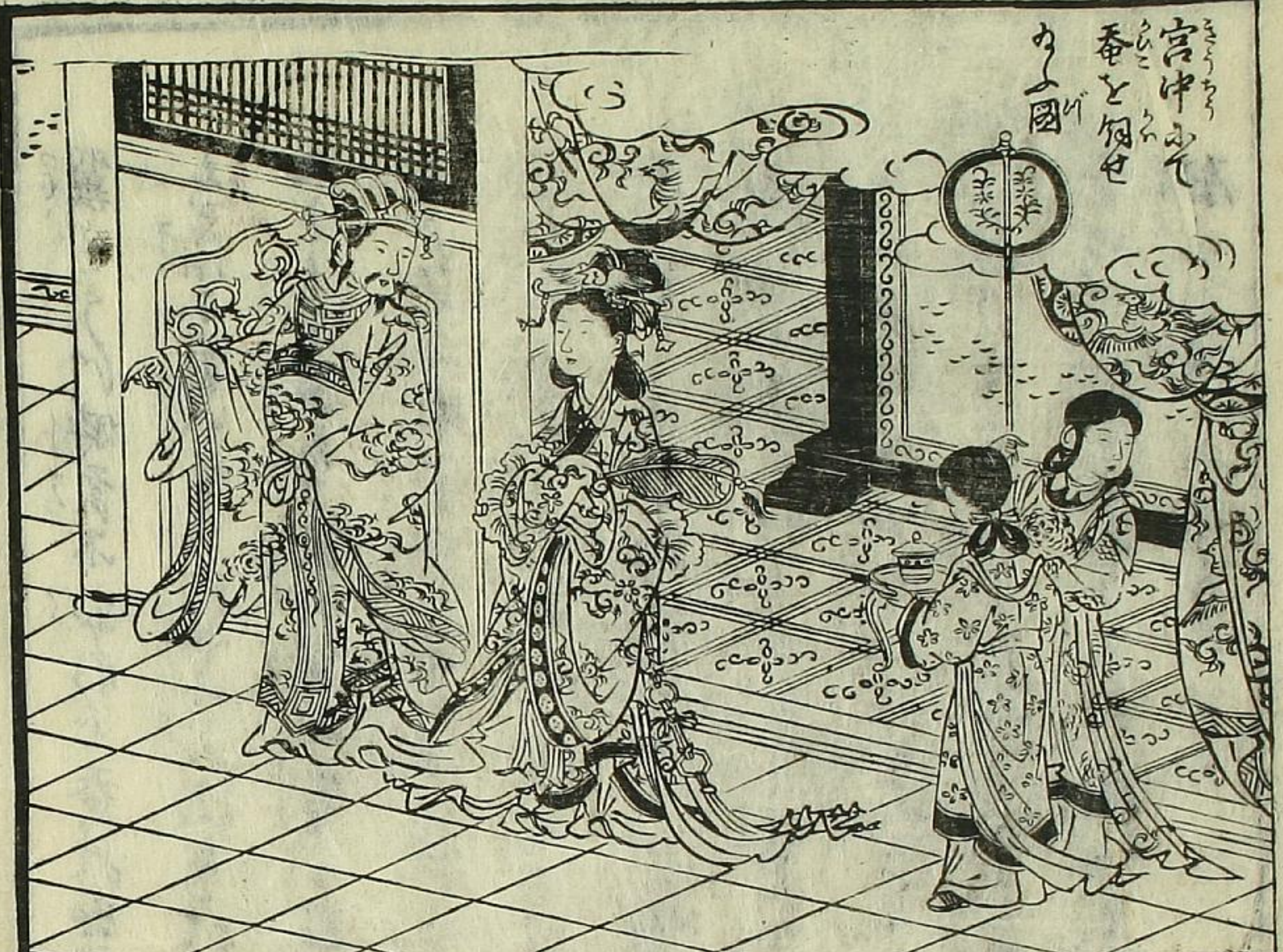
是月也命野虞母伐桑柘鳴鳩拂其羽戴勝降于桑具曲植籩筐后妃齊戒親東鄉躬桑禁婦女毋觀省婦使以勸蠶事既登分繭稱絲效功以共郊廟之服毋有敢惰也章は三月ふなれば野虞をく山林田畑を治るを奉行ふ作せく桑柘を伐るは之を裁制せしめたり又堯乃

養上ノ五

翼をうの時言ふを蚕此如新也程子云一節一戴勝と云る俗小桑いをくれば中つふはも此羽う所りて其微ものと思ふがごとく其名桑の樹小宿るば早く蚕と云く所志柘あつひと松蓋薦菜た中るれそのそ種く不用忘せよと云ふ半かりを治ましむるは天子此後まじり齊し終ひみづる桑採採りて蚕成飼せのふたり又書蚕の圃は婦女を禁し先務ひを治るふとを停止せら其其時平生婦人のまへさも業までとくこれをしてぬきても扱なれ中ふし繭ふ形は絲をこじめをのく其いふなり一紙致へて種くふ業しぬいなり



伊勢を以て成る一々中
 には書蚕乃法を学せぬ
 たり二月おなねを庶民小
 令して蚕を飼へ先さひ
 又中春庚午日蚕神をおも
 ふ事あり又種は法津打
 産後此くおほり是小蚕母
 とくよく正しく婦人と附
 産まをを守り皆終るとや
 三月おなねを採成りし
 中此日おなねを洗ひて

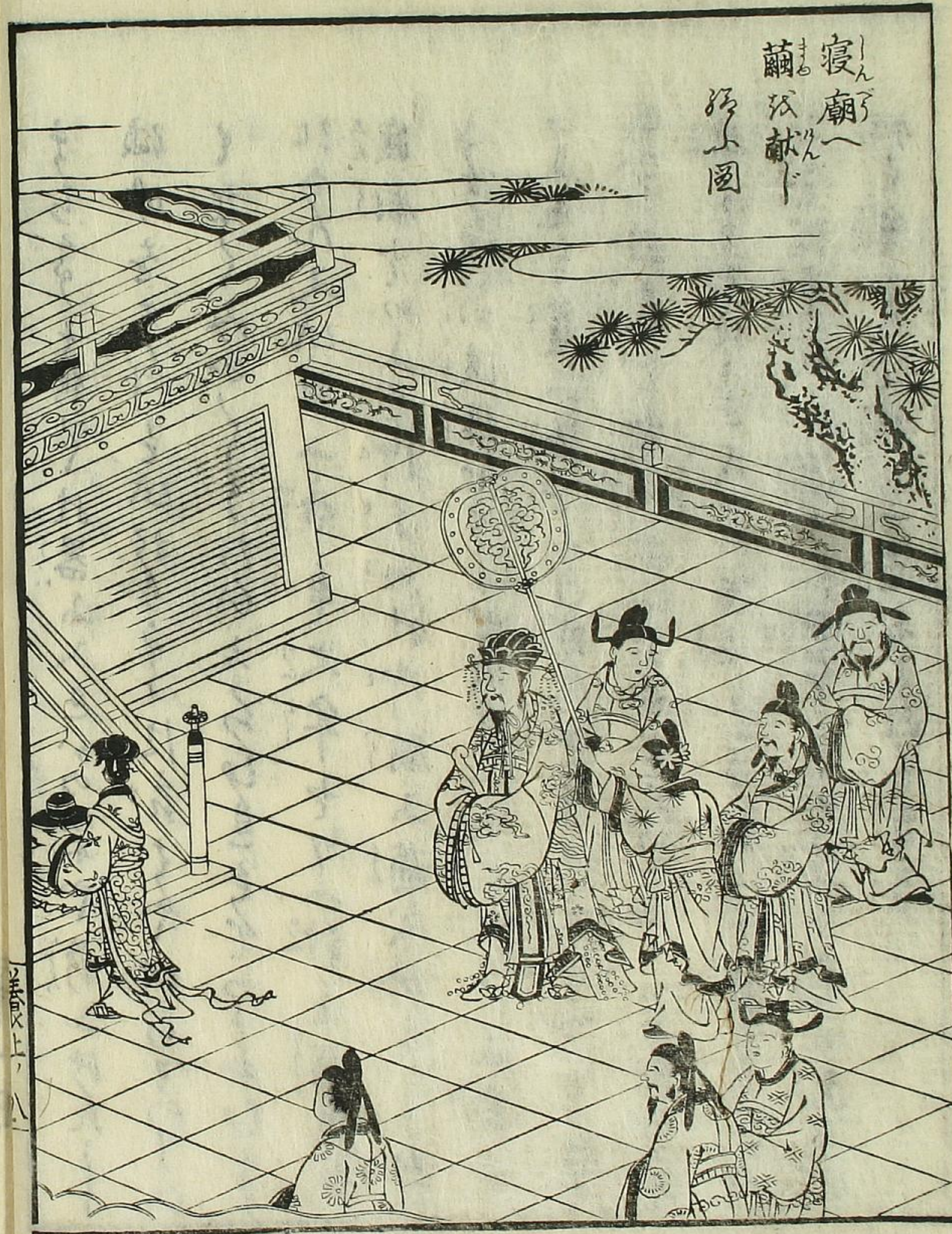
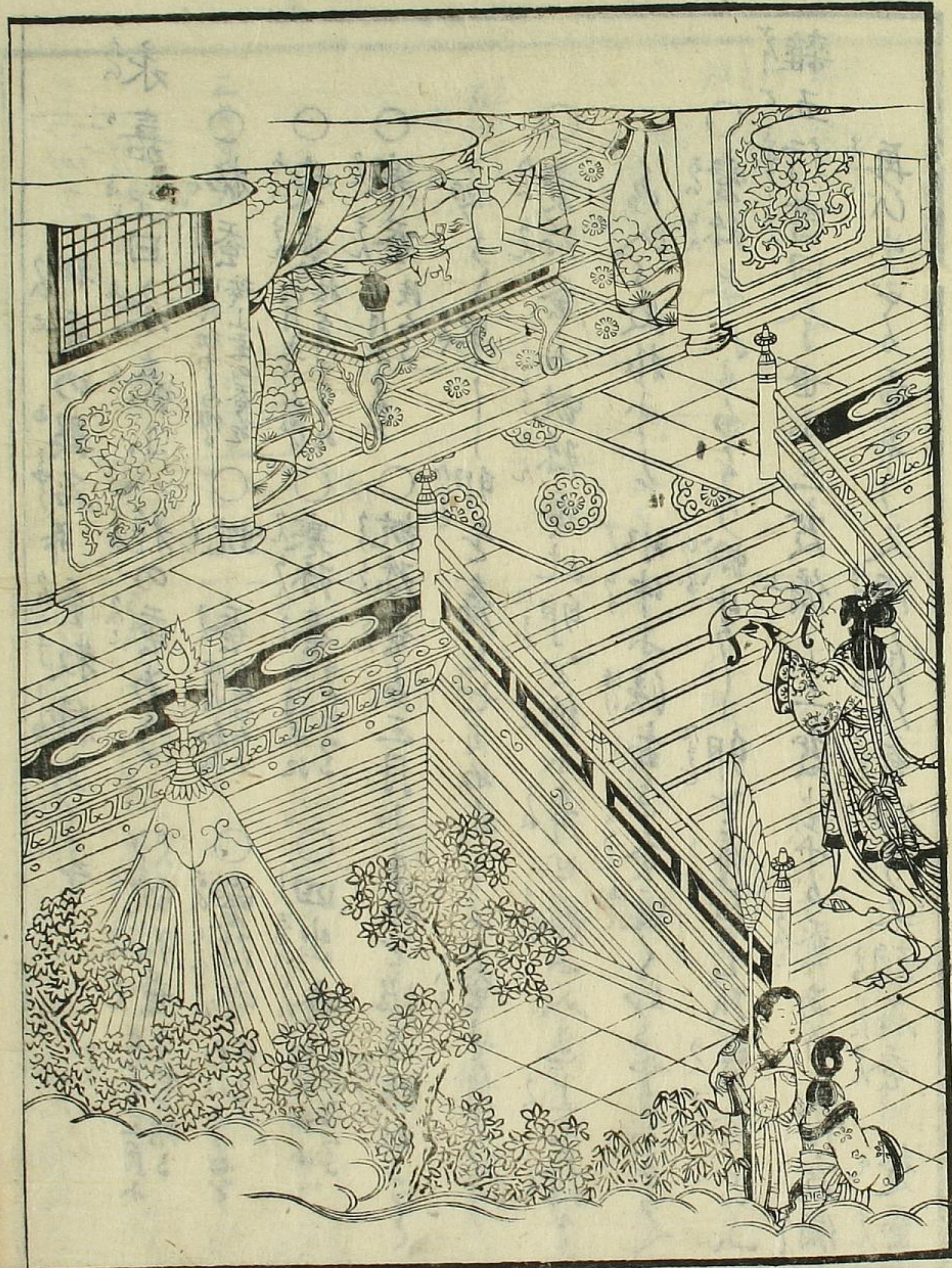


宮中にて
 春とゆせ
 の國

晋揚泉蠶賦云
 凡物乃生於受氣とくのみ唯
 是陰陽此氣和して交りて生
 るはかり卵ありて生るるの
 らみお纏綿して自然り
 其氣内ふことなり就中蚕
 と其功大ひかり上を天子
 后妃乃盛服せり下を庶民
 の服と有りて貴賤乃おと分
 る成り月々王者る人その
 功をたつとも二宮夫人世婦此

去里又歸して温ふし蚕室を催し蚕此生れ或は時或れ
は東方に志門るれ桑葉採り勢其用を和らむしむし
眠る前も桑をひくし又起る時をゆるくせしむし蚕
蟄くせ見ゆ糸其形作く時を就の雲井を垂し不苦し
伏す時を虎此際糸不似し身を固しして和らむし桑
朝日成受まはさしり申ら登天の勢ひをなれ又桑にかけん
やまゆ時を桑や菊をのりし席を作し温む時蚕室不
入は夕日此陽を成ゆせは既不盡く繭を打れ蚕神
清酒を指し家内は更なり迎禮の者まをもうらむ
桑此を和らむ蚕室もを風をひきぬとわたり又蚕母を
たしめく蟄成結ひに結むし又はゆかしくたふす

まらちそそ結く此器ふ入はかの山本や菊ふけれし
はゆをちけをけりしは糸をちや何のまぐしひ
もなくみおくるたひをちひ色をてしおむ事
にまん又け月小帝身大年やし神を祈り
寝廟をりして神先祖此神廟小繭成結し
うまひ其後練とせし又后妃身三益や
しふれを獲ふ練をくりたまひす夫人世婦かんど
しふれ教多し宮女達もをかししとあまあたまし
まらち下流くは民身婦女ふしし終まで農事此職
小蚕成事し織造の事業として老うるその糸を衣
ぬき穿るは綿ふけ道ふよれをかり



神蚕の異名并蚕教種ある事

永嘉記曰永嘉小八種の蚕あり

○杭弥蚕 是は二月小

○柘蚕 四月初小

○蚕 四月初小

○愛弥蚕 五月小

○愛蚕 六月末

○寒弥蚕 七月末

○四出蚕 九月初小

○寒蚕 十月末

○杭弥蚕と三月小と白と化り織物と

○早一卵を産む七日小して蚕生はと

○愛弥蚕と杭弥蚕此卵と紙小産せ器小入上を

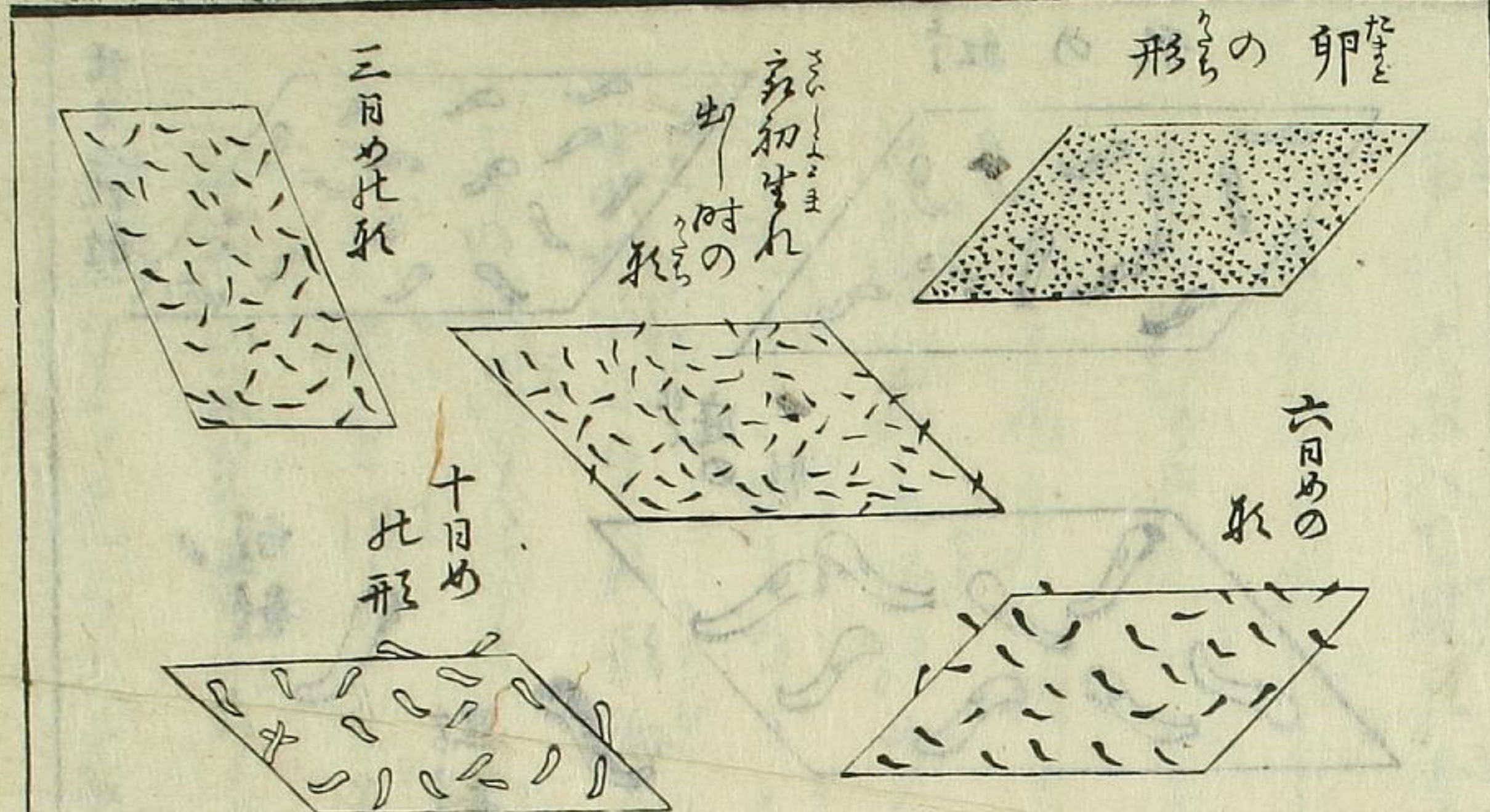
○入しぬ柘ふして水中小漬蚕と蚕速く化り小

○愛弥蚕はまより織物一卵と産む是は愛蚕と

雜五行書曰今世小三度俯一皮生する蚕あり又二度俯

再び生する蚕あり又頂白丸蚕有り又顔石蚕 楚蚕

卵の形



黒蚕 灰児蚕 秋母蚕 秋中蚕

老秋児蚕 秋末老獬蚕 綿兒蚕

此數品あり凡蚕小大小の異品

有り大の蚕と荆素魯素は多

善し小此蚕ハ蔴と和素にて

若くは小の蚕小荆素はあ

腹と破る此患あり也

杜陽編曰永泰中此彌懼國

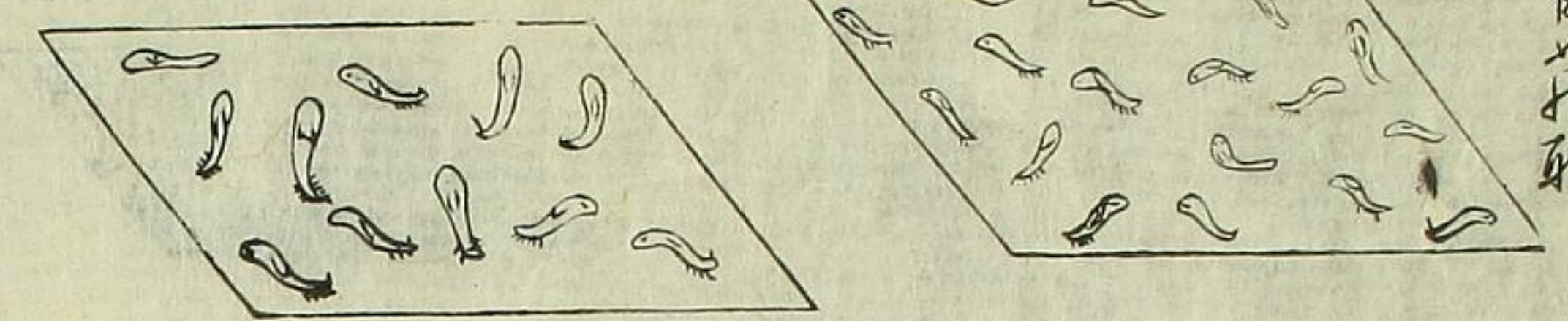
絲と貢を其國小素あり枝

ろりて地を鷹入して大素

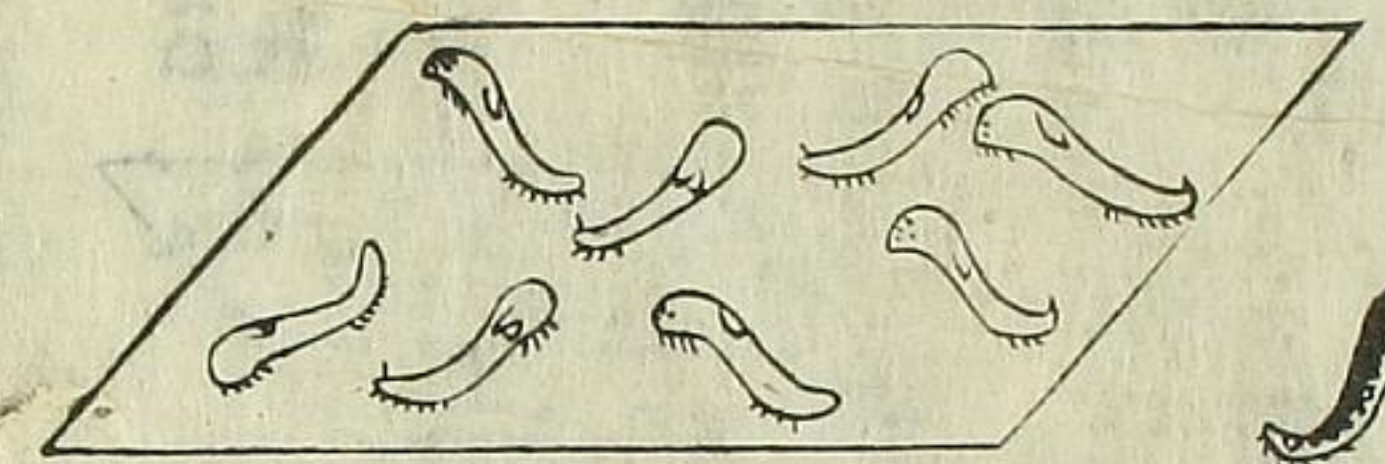
丈小なるものと又六丈其枝小蚕あり

北日めれ形

形の船



庭の形



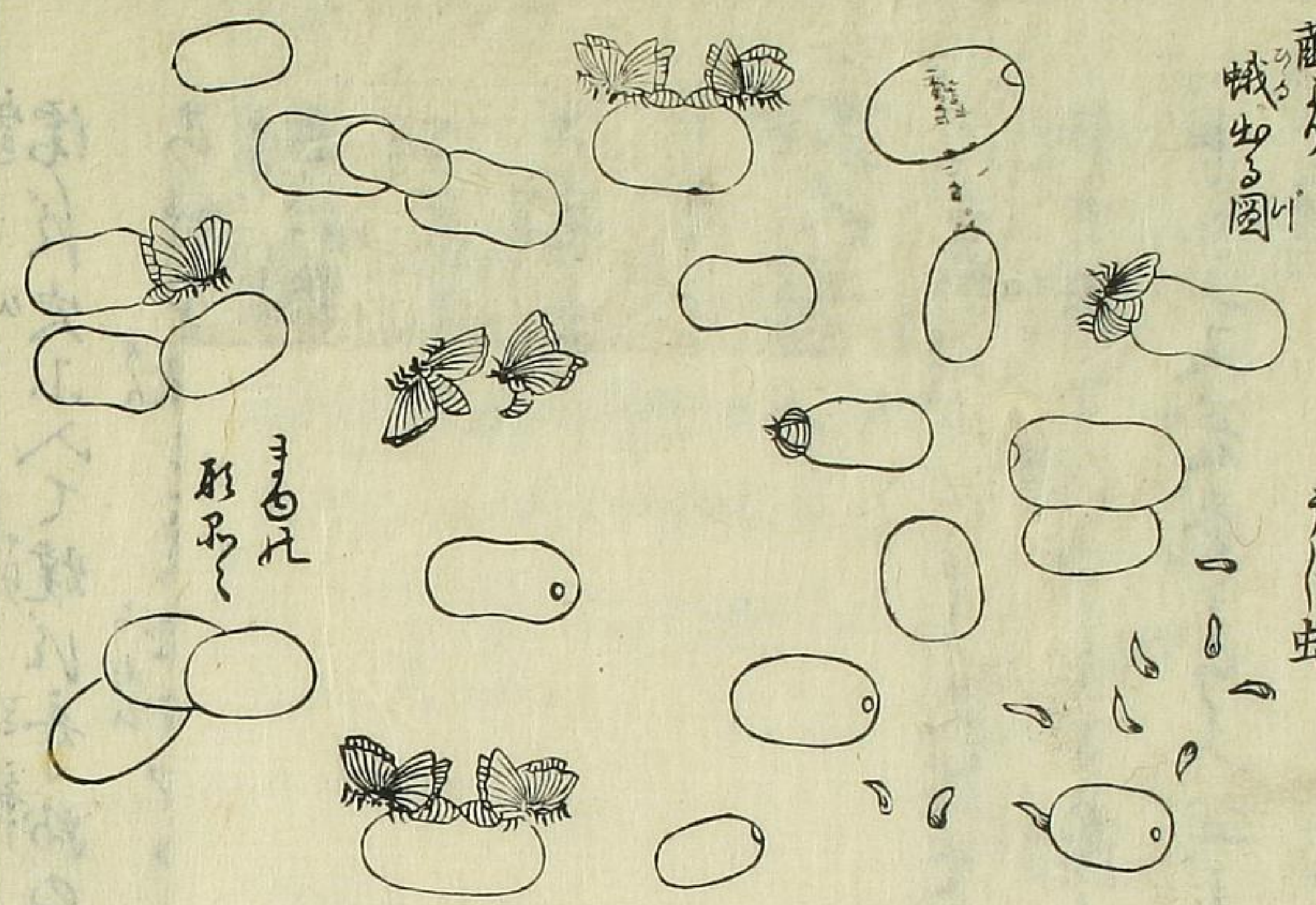
白蚕

黒蚕

長四寸斗其色金也有り絲と若
 色小して其色金は是尺斗これを
 史は是寸斗を延ると有り
 和漢三才圖會曰中華陰山賊眉
 の二山と雷棲と歴世消は其中
 小蚕あり雪蚕坐り小大執の如し
 又水蚕有り負鵝山小生は長四寸
 斗其色小して鱗角あり霜雪以
 度小耐小滿を法する長サ六寸斗
 五色の絲を生はは絲を織する
 示は綿成文綿と有り小入ね

濡は火小入て燒は弄妙の絲かりびり
 堯帝北時海人
 此種を献き其地合からく暖ふして和らなりこれも雪
 蚕此類有り又石蚕あり山川の水中に育て石小つれて
 生はす色多く法する釵股の如し長サ寸斗其身
 と度小其色泥此れ小して蚕其中小あり春夏羽生
 して小は蛾となり糸上は花糸又海蚕あり南海の
 岩北回小生は形梅指の如く其色白粉のごとく真なる
 その成得るごとく又胎生とて蚕小く生るるその有り
 母也老を同しうも蓋し神蚕有り又曰原蚕と暁蚕
 小なり又夏蚕と有り或は魏蚕熱蚕といふ是皆夏蚕の
 異名なり是も式表は蚕小く再び繭と作る周禮小

繭
蛾の園



うら虫

原蚕と禁むるハ夏蚕ハ個ハ二ハ
小桑系法二皮揉る由ハ三皮めれ
芽うらむり桑株大はふりこみ
換むるふりて夏蚕と禁むる
今ハ形小桑ハ所ハ白繭
蚕古に夜眠王に夜起三日教
九三十七八日うりに十日解あり
まもとほふ蚕此項小園字のい
の字あり又黒斑色此蚕あり又
黄なるまもと此蚕ありこれと
らんことり又行夏とつ白丸

美良上ノ十二

春蚕あり三十日解ありて繭
形ハまもれ皮薄く緑も
よりの十日解ありて蛾生れ
是夏蚕の親なりはまもれ
蛾を出し夏蚕此種を取
又夏蚕あり種を出せはゆ
の長行夏とつ白蚕此種也
凡繭小長短丸角尖等此形有
蚕まもとめて日教十七八日ふりて
朝ふ時小蛾出雄と雌と
備して静かり是と採分て交合



さ世朝つ時より至ハツ時まで合せ垂て引をねし雄と控く雌と
尿をさ世紙小の世卵を産せ種とふ以職を羽少く凡卵を式百
に及粒産せ之に周云々朝婚礼小雌雄の蝶を用る事ハ子と産む事ハ子ハ何れも
雄と日又過く死を雌と二三日居く死を又弱之蚕とま由の
中なる幅織小化しがく七八日と経て長サ式出斗此黄色散
虫中化しま由り出る是と東國やういふと云ふ中國はま由る織
出れ絲小取ぐくく去絲となすなり

按むる小美玉本物とも蚕此種其多し一志れども當世
專世上小善ふ所の白繭蚕小勝るものなり又本草本の
糸に皆蚕ありて葉と喰ひ絲を吐く物れども天下の衣
服となすは素本此蚕の絲小志くも此かし一故小今世上小

はかん小抄ふ所の法をえりて書蚕此規範と後子の
時乃蚕とあげてめらゆふたしげ

天竺霖異大王此中

或書云むり一天竺舊中國小霖異大王也以ふあり后と光契
夫人とく一人の姫あり金魚姫といふ后薨下りて後大王又
新く小后妃を具しありふは后姫ぬく姫をにきて父大王小後
言し姫を獅子吼山といふ所小控させめふ志り後小天の加護にや
有らんけがふくましくして獅子小乗ありて舊中國小帰らせめふ
よりく又鷹群山といふ所へ控めふは時多くは鷹ども来り因を供
て姫を育とける大王の后下此より邊小傳へて密に姫瓜供せし
於小帰ふ后又姫れゆふと悪く海眼山也とい傳へ流しめふは時邊

史記孤助けそのとれお小送り後ちれお怒く臣下に命し清殿乃
 庭を深く堀く堀を埋免殺させられお其後土中より光明赫々れ
 けるとおやしみ大王堀せえんお小に彼姫いさご意なくおやしみお又
 素の本れうろおお小お世滄海一流し終お物お小お日中幸陸玉
 豊良湊一流寄お浦人お程を助お介抱しけお小愛程もたなく彼姫
 意しなくお世終お其靈魂化して蚕を成おるとおやしみお蚕初お
 岳記を熊子の岳記と云二度おれ岳記成鷹おれ岳記三度おめとおの岳記
 度及めと庭お岳記と云ふお彼姫天皇おく度及の難お遇おひし幸と
 かごとりてかくるお名おばお幸とぞ

替種子見振の事

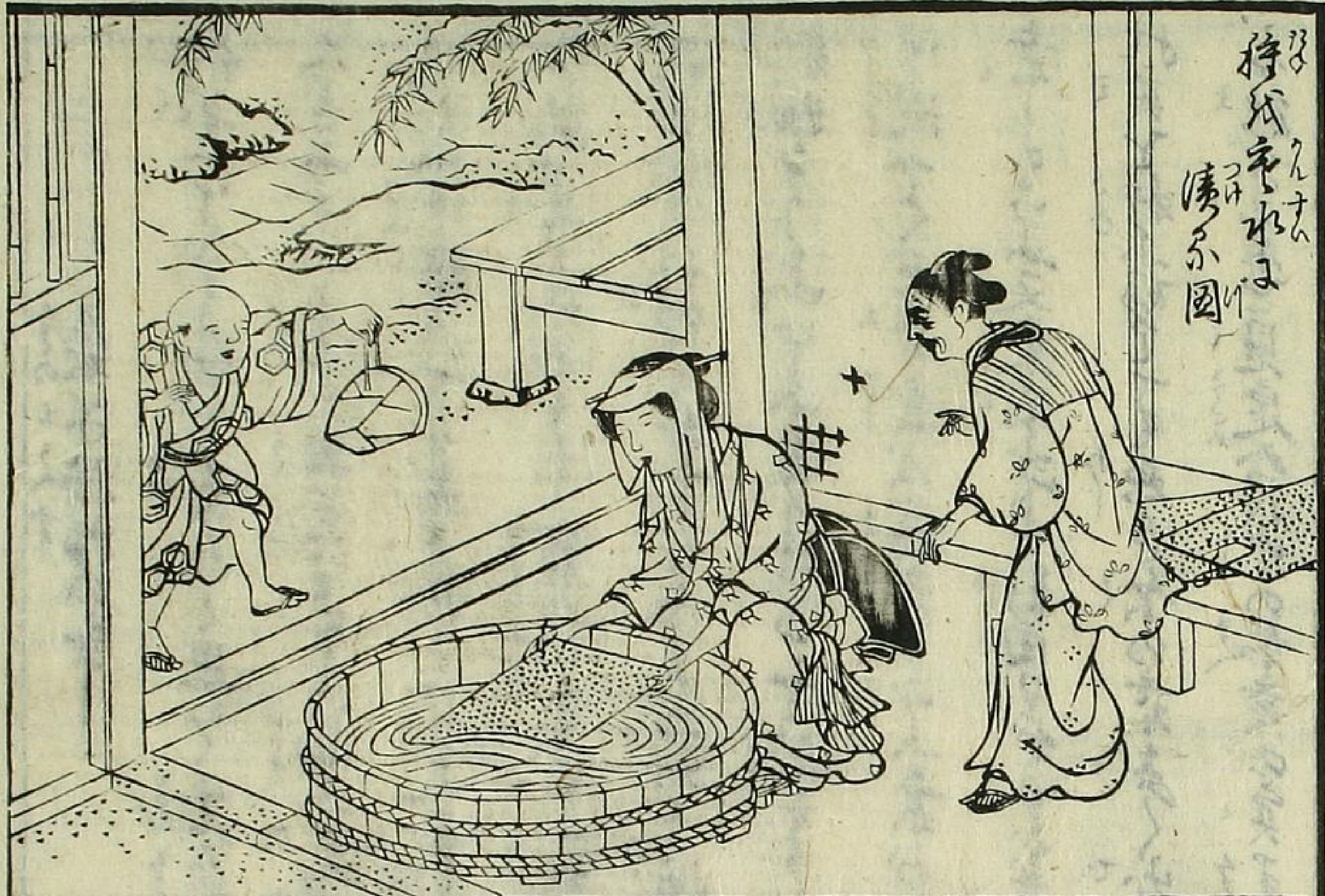
種子と陸分揃うく面振おして生氣強く卵の中おくお種子の



地合能きあり蛾のもくく種子の
 ちくく能く悪き身ひなくお扱
 お種おぞ紙お能取付しと云ふと
 ちおべし種を取お蛾を指分おれ
 蝶をくくと名付て振出し蝶は
 上中下お仕分おなり種蝶の種お
 ちおさり悪き蝶お種お下おとち
 べしお種の色お其お地お種お種お
 種おなり赤お地お種お種お種お
 種お種おし赤お地お種お種お
 ちくお種お種お種お種お種お

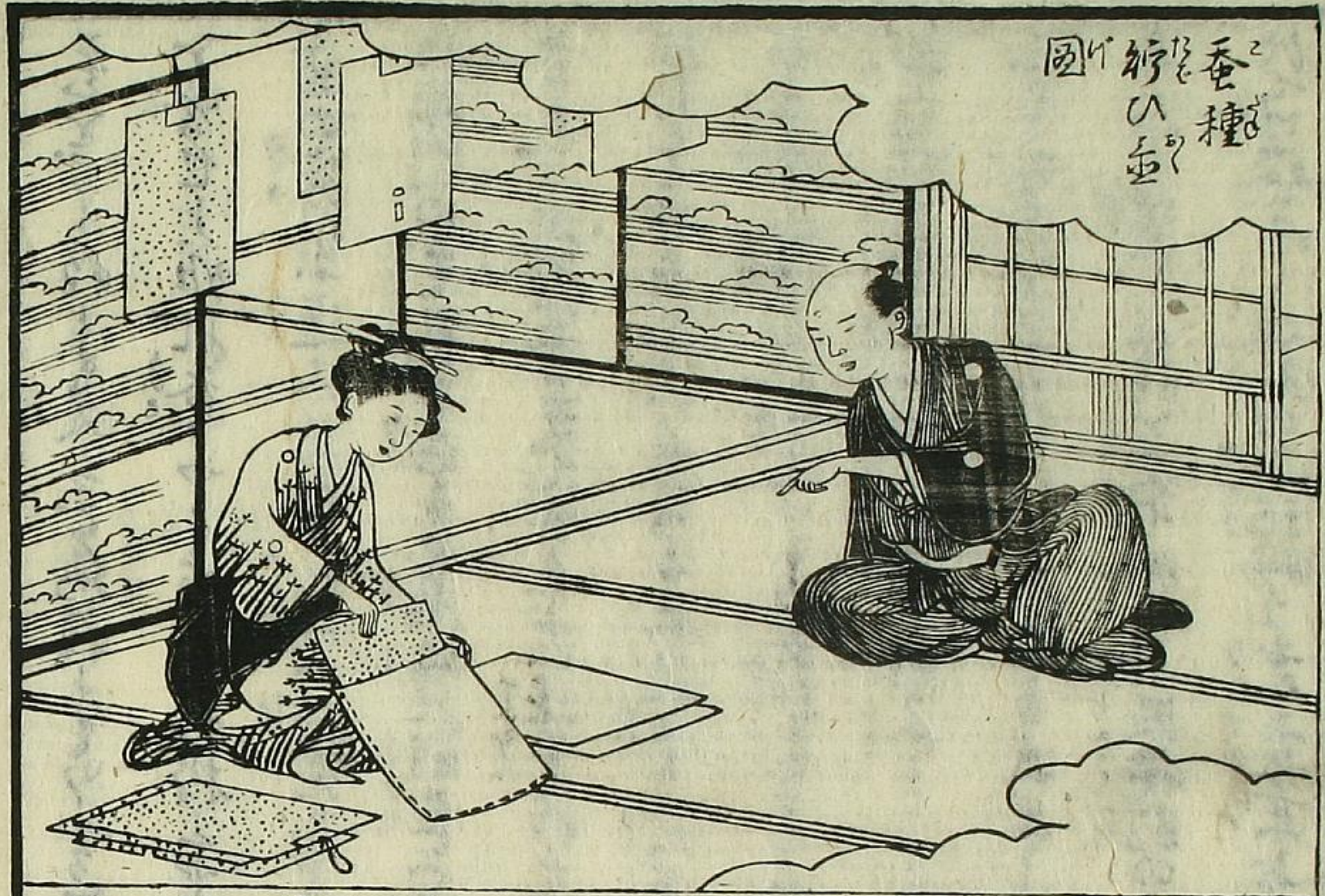
志土地の素喰一蚕此種を採扱さふして種ふおあつじごとく己
種を種乃さふおあつじごとく何國でも地面宜しければ場所上素代
此等或は刈素又いりた素などにより何方此法をのりて書いし蚕
の上繭少く物一蟻採扱さふして種を種上と凡其次の種を場脈
切又さうり種或さうり種など色々れ其名何り又蟻の性悪しれど
さうり麦版の色不似るとさうりて名は希しや性れ蟻を白さ飯
のてりしや上は種ましくよくまゆと取んと思ひて中一種子れ其
吟味まきてさうり中一ツの中小蚕二ツ三ツも一ツ小籠ありて
是と糸にさうり耐いゆし多く虫糸結ま悪しよつて是と降くま
小まらば大まゆあつて取し種子國さうり物て夥しは種子と求め
一人と翌年蚕不採にして上作さうりておななくおまゆ多くおあつじ

是とぞ種も又さうり種もいささこれ其名あり種を才一其年上と素
と喰上作此蚕少く取し種扱とせ初るし少くも何方小採あるは又い
素の宜い小過不足あるは或は種元悪さうり又其家にならあるは後
に採別の宜き小苗なる風取れ時小種れまゆはおの事一ツあつて降り
育さば其種蚕変て宜しげ陸分種元は吟味して上種を求むし一
は種をまきば蚕の音悪さうり年此等り我運さうりせをゆる人多し
是と大食ひつて少
かり蚕小種は生あるものと種まきり一切の事本とま皆親おし
木の種と種て母れ樹を種まきり又年此等りあつて種扱さうりお
蚕と取ふ人も育られども是と其年のさうりはく種扱さうりお
まゆも況や上種と求て飼り一限採別の上作まきり種子其見分
はては情さうりは後の子記ゆり素責素おし此間少くも大なる採扱
のさうり



種子灰寒水
漬る國

種子灰寒水つひ漬るつひ國
 ぬれた先又一洗つひ小性弱と卵たまごと生うま性強つひさその半くみ切きるき蚕ま生ま氣き清きうきた
 了つひ又つひ水つひ月つひ小風つひの耐つひ痛つひおつひとつひり
 取つひはつひりつひ漬つひるつひ水つひもつひありつひぬつひ漬つひるつひ時
 と大つひ盥つひ水つひと入つひ漬つひるつひ
 合つひものなりつひをつひ時つひとつひ至つひ五つひ時つひ小日つひ和つひ能
 をつひ見つひるつひ種つひ灰つひあげつひべつひ一つひ竿つひなどつひ小
 けり日つひ陰つひあつひくつひ晴つひまつひとつひ



蚕種
行ひ
國

蚕種毒忌日つひ行つひ指つひ此つひ事つひ
 種つひ子つひ求つひてつひ後つひとつひ紙つひ袋つひ小つひ入つひとつひ氣つひのつひ雜つひぬ
 中つひにつひてつひ夏つひよりつひ羽つひ生つひ年つひ此つひ毒つひまつひずつひく
 冷つひしつひ凡つひ所つひへつひ釣つひ玉つひ屋つひ一つひ種つひ小つひ牙つひ油つひ氣
 垢つひ氣つひ多つひ糸つひ粉つひのつひ乾つひ漬つひのつひふつひ葉つひ麻つひの
 子つひ挿つひ腦つひ大つひ毒つひなりつひ又つひ登つひ小つひけつひ並つひべ
 ぬつひ或つひとつひ蚊つひ帳つひ帷つひ子つひ小つひ包つひひつひてつひ大つひ小
 虫つひとつひりつひ熱つひトつひてつひあつひ月つひひつひ懸つひとつひ物つひ小
 入つひ屋つひ一つひ日つひのつひ苗つひとつひ不つひ燒つひ火つひのつひ近つひ所つひへ
 垂つひりつひ懸つひりつひたつひてつひあつひりつひ白つひひつひとつひ忌つひむつひ

桑子植木の事

何玉はくも蚕と高んと思つて先桑と作らる半肝要なり桑は木の葉
 大きき少くして多く能く能く桑の葉の面小光澤ありて木の葉白く生る能く桑の葉
 は桑の中華にては魯桑と云ふ又葉少く桑に股有て子と多くは桑と云ふ桑
 を荆桑と云ふ一農家全書小抄より又一説小桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑
 其実桑に似く桑大なる桑の何れは小桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑
 別物なり山中小育る桑を荆桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑
 中国ありて魯桑は真桑と云ふ桑少く荆桑と云ふ桑の桑は似たりと云ふ桑
 桑ともつて又東國光る新田にせむさぎ田にせむさぎと云ふ桑は似たり又桑
 此桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑
 と能く桑と見定る月中の桑桑の実多く能く能く桑と云ふ桑と云ふ桑と云ふ桑

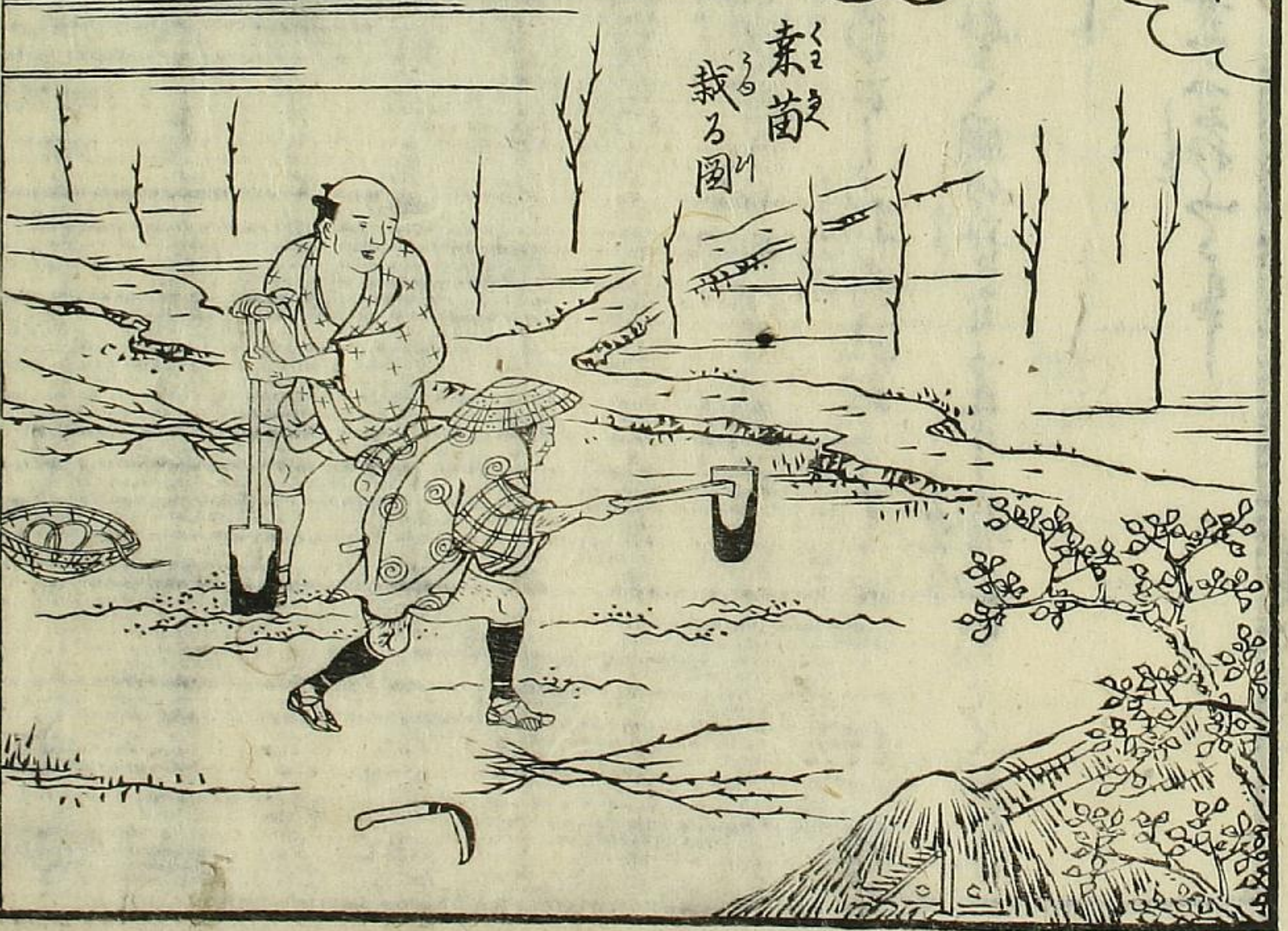
本はか生る桑一未生と云ふ
 取て根の支端を少く切替へ
 心中と持不取へ一實の先
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 を入て能く洗ひ濁る物を控
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑
 桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑



桑桑と云ふ桑は似たりと云ふ桑

け時初小生也... 其年十月... 皮赤也此物... 魯素と云ふ... 切て上田... 是は... 真を... あり是と... 素樹を... 世小... 此...

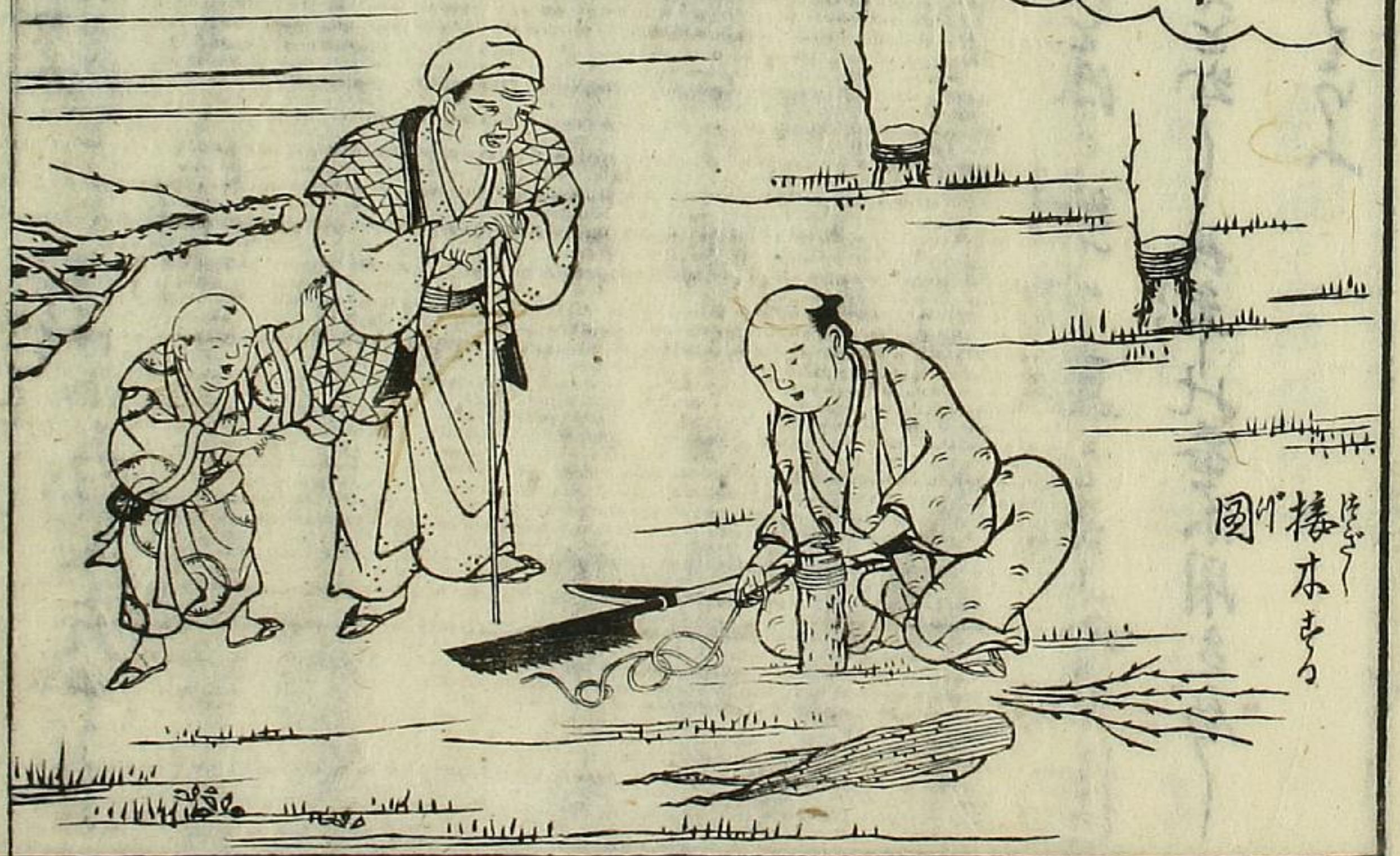
生立本有り又川... 川際中... 去去地... 栽... 子... 是... 地... 山... 中... 莫... 尚書大傳云天子諸侯



必公桑蠶室ありと云く丈夫は何必ありと云く女此業に男子の
 手と費さば耕作の財力不勢て去ると大金成得る事一歳小農民の助
 成國家と浮を才一と云く異國中にも五畝宅樹之証業と云り
 物よりまごさ程をせざる必荒地多くや用の茶本生最上流小空地
 中如く歎く此年好くぞや物れども蚕は何方不細く多きく即てむり
 さりのかねを昔育の口徳を去るべしつづふせだちる捨失あふ一又何方
 功者此人を年々子利運を將其財力少く田畑多く持あふは荒地を安ん
 かりて最貴百倍かるべし一家も種移れおく況や一村一郷
 かくれかくかりせだ家は方不溢なく國の豊かる事春和のてく減小
 理安民の急務也謂川登

桑接本は根の事一附、桑小節、

桑接本は根の被魚桑と云く小見立
 桑く接だいと云く一三月頃芽が
 物時本と地より或守上と切と桑
 の枝を接産一む接産一の精
 氣能さ方一接産一接産も
 裏表あふ一是と遠とぬ
 中り小むべ一又至て本の末
 と懸一其右の本の梢の中
 小真育七性弱一枝の勢ハ
 洗よれ水と接産一接産と赤に
 向く枝と赤に白接産と赤白



桑接本

おふ向け是まで育しうま 軽小橋かろこはしへ一日いちひ度と一橋つぎは小おれ入いれぬ申まうふ
まへ一又取接とりつぎ成なりたけ入接いれつぎたごりいふ色いろは接つぎ接つぎあり今接いまつぎ別わかく申まうふ
所ところ不ふ徳とく本ほんと接つぎ又またとけ一本いっぴんの上うへ子こりりて業わざとて又また圃ぼととよ上うへ子こ取とりて
乃なほ其その人ひと不ふ陸りくくく学まかぶたり

去く八や八ばん秋しゅう前ぜん後ご蚕さ吐とふ時とき分ぶん大だい和わちり素そ仕し芽めつと枯かく幸さい回かいあり
其時そのとき日陰ひかげの所ところと日ひ然ぜんと和わ解かい素そ仕し精せい氣きりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
素その芽め強つよく痛いたまじ又また日陰ひかげの所ところと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
急いそ小こ和わちり和わちり芽め由ゆたが痛いたむ其時そのとき物もの日ひと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
おちれを痛いたむとせりて又また素その根ねと深ふかく掘くて中なか糞ふんを垂たれれ入いるはは
物もの日ひと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
去くり素その根ねと深ふかく掘くて中なか糞ふんを垂たれれ入いるはは



取本とりほんする圖ず

素取本仕根の半

素その取本とりほんと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
三年さんねん目位めい小こたりと素そ小こり時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
地ちりりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
芽め多たく物もの日ひと接つぎり
翌年よくねんの素そ彼枝かえだと七寸しちすん程ほど宛あ回かいと素そ
若芽わかめを中なかと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
彼枝かえだの素そ付つけ下した取とりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
ひと接つぎりて返へりて時とき分ぶん物もの日ひと接つぎり
互あ押お付つけ圖ずのどく深ふかく埋うめ免めん踏ふむ
付つて地ちと堅かく志し免めん垂たれれ入いるはは

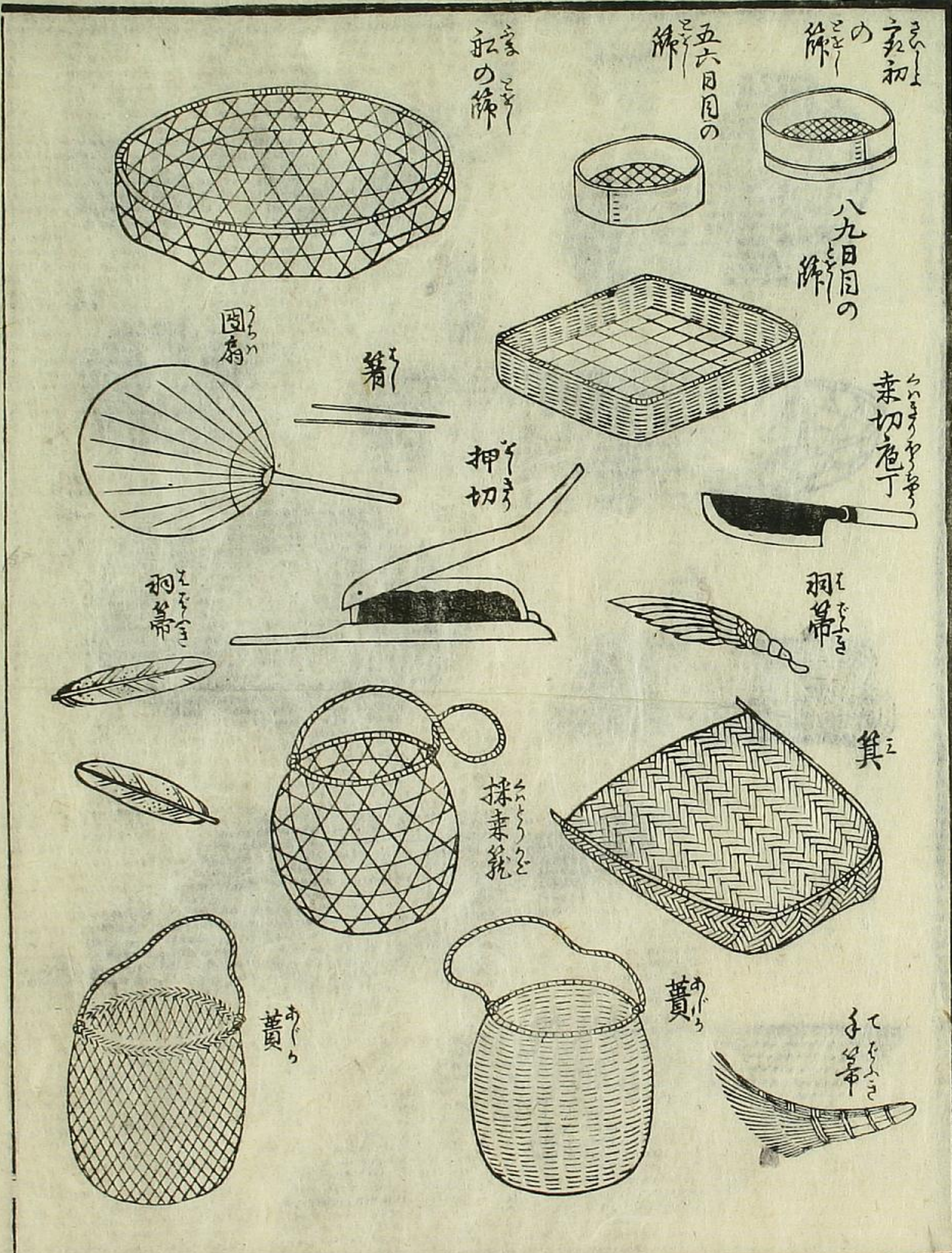
十月以来七六病を付く埋一為芽の所より根を多く出さる又病を
 付は其根埋ふ時根と知る事一是取本此終年之明年の根
 と煙上ヶ種本のてくを中づ小切離一亦小種之是小下葉杯
 退く入を庭一是枝を水少く八九中ふとぬは方なり

桑此虫送り并葉の病を際ふ事

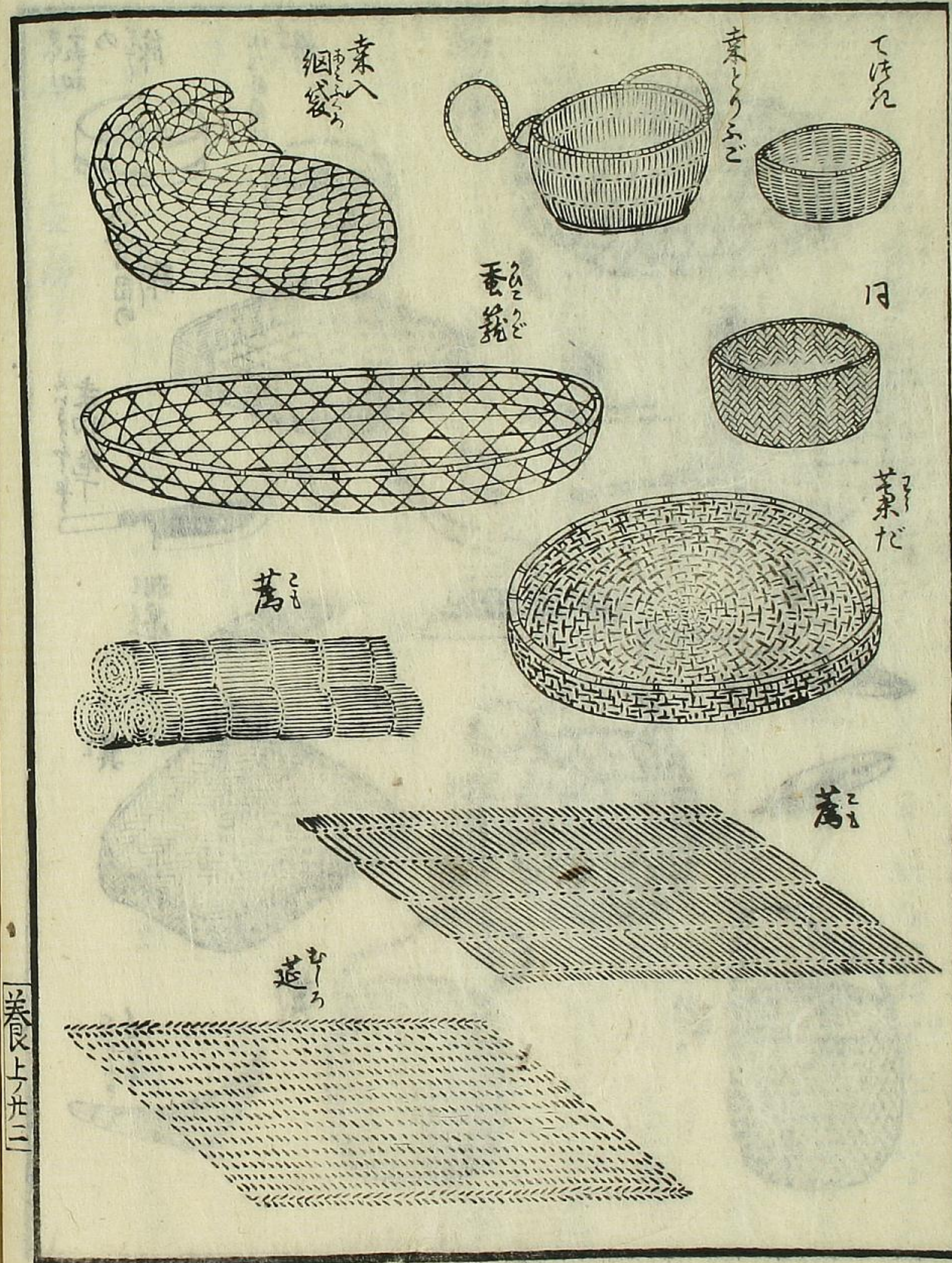
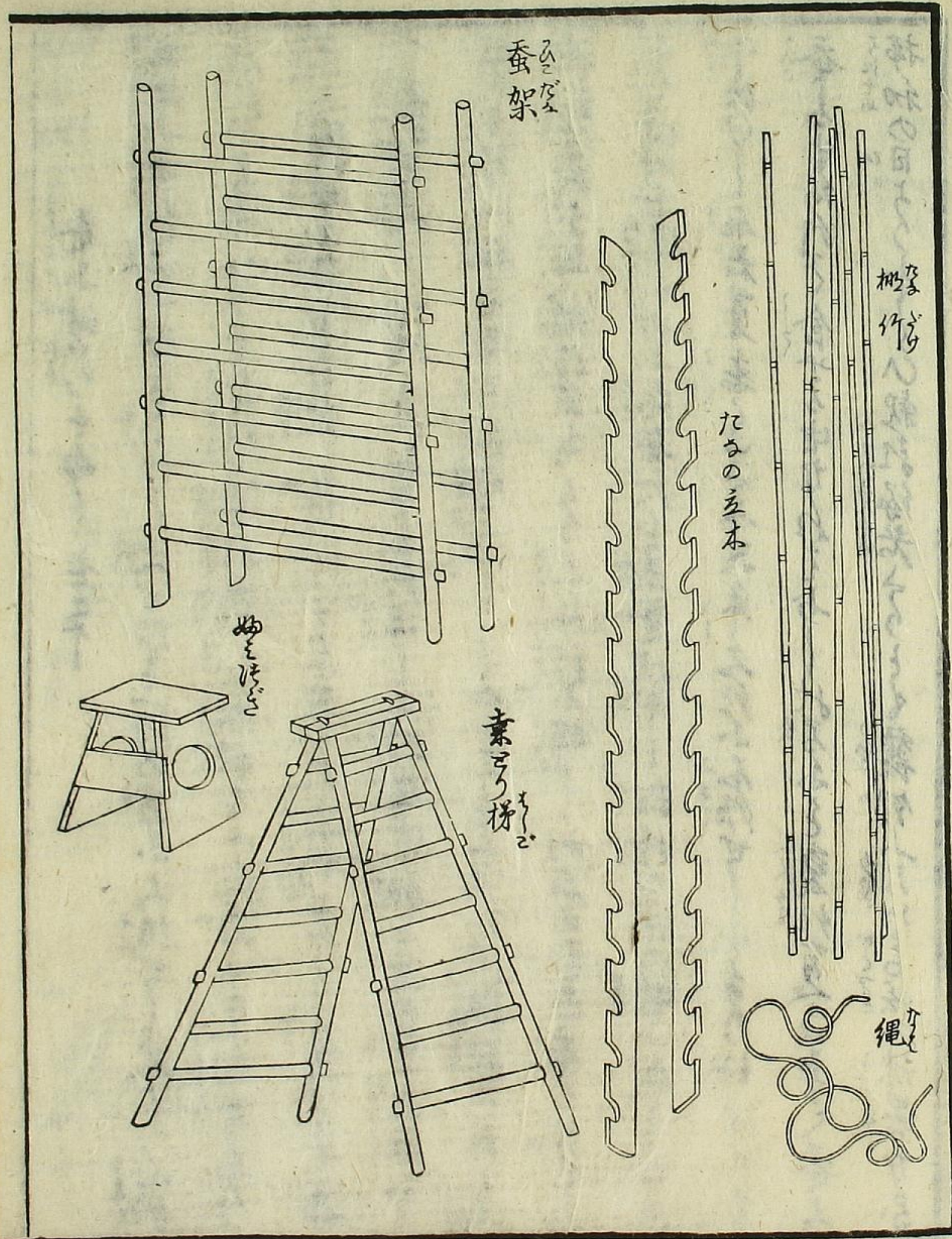
去小初葉茂る時葉に赤色かり病は幸ありは病園く小て異名
 あり中国少くはせとらふは病はくふく梓をそのくおひぬ一
 其後桑は及程多くなり葉小大毒なり又葉志くみせのふ白れ虫ぬ
 出来葉の糸痛む事あり是も木のてく榊取べ一葱してかこのぬこ
 病はく去地ふと桑根小煤の粒感と蓄麦売等此灰汁を育るものと
 並は病少くとり去蚕幼飼の時桑此本に尺とり虫とり小虫多



此おろし此等と日か紀お
 大已貴命少名命や
 カとあせ天下城
 病をおさひ方と
 の異と根ん
 たを小其梅か
 厭法成定む
 あ行と神代
 一のま風
 又とぬ一の
 三夏の日
 おろしをせは
 くれを異國
 あつ年
 也



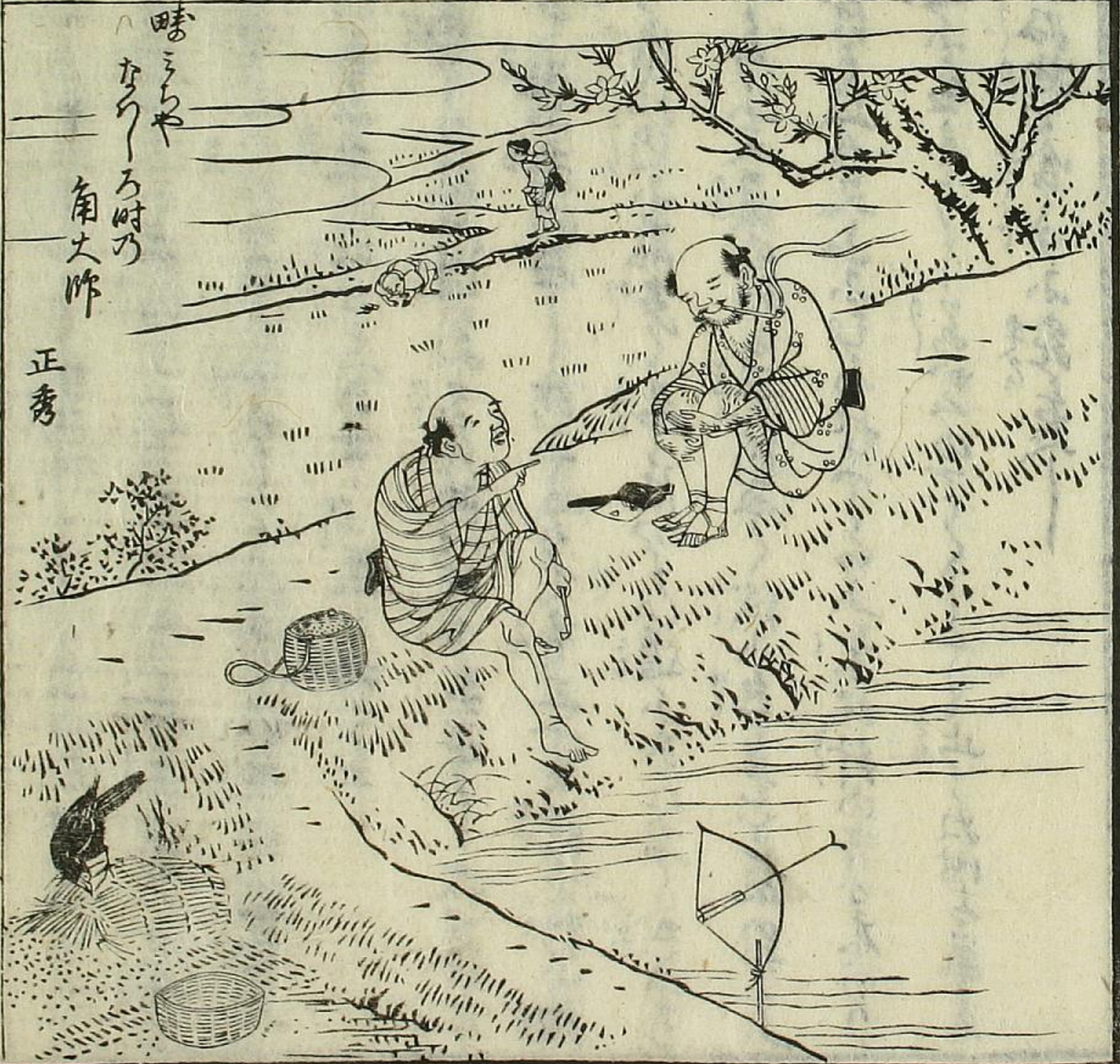
われて糸の若芽を喰ひ枯本れどくなら半有りは時出送り紙すふ
 國々々々色々々これあり中國色は蚕神小初を又と産去神へ指だぐ
 葉人取あひと葉葉馬など焼けて是小糸のひり紙がー兩葉せ紙を轆或の
 標貝筒文ぞ快乏子信糸ア大勢集り糸此虫を送る仲のう之はあり
 也雜子立糸此色紙白り川あり方へ送り知は是とひりおりのとふ又糸の
 本にさ先とふ病出来本の皮は糸色ふなり柄くこあり是と取天虫
 良竹の厚く或はけ死のれあく魔さ防べー
 養蠶法道具此中
 養蠶此法道具と國のてくして悉く此内不用者も一又繭作
 是時小決り小葉の乾葉葉ふりるまで糸方不用者して暖氣を紙
 乾燥ー並海ー



蚕小波のきき事

或里小蚕成上小蚕さ下にく火とたき一時の房小大換せ一人あり公治
 登死さるりむり去所の百姓苗代小耕種をせ居る小朋友あり
 平小田の畦小腰をけ体と居る小思ひ長男小なり豆後まて居
 て立別とまより姉をせ居をせ居歸小躬藤小親と苗の芽立能て居
 故小まれ小親と芽立甚悪りりともや是と三月の以親種瓜小漬
 其後苗代を播(彼種瓜あり)上能種小啼一時右の親種甚く芽を出
 きては時を遠居田小為種瓜を甚芽此出小親種を田の畦小並さ日小
 干はけ一衣若芽甚くつて其年大居小不居せやさるり体してや
 蚕と生何れく食する中けれを少小此居小を愛化育をせ事之蚕と
 掃初の日よりをとい親親縁若りとも種飼するの書法の体若かり

とも平小波のきき事
 手播るれ根大切小播る
 終日六十日斗
 の法ありねを種敷を
 養て育つべし礼記
 月令云種瓜婦女母親省
 婢使以勸蠶事とい
 亦もばをかり種る不五
 なるもの一折小あさり
 ありて是れ長男小時を
 後一織小あわしく



時らや
 なりろ時乃
 南大作
 正秀

素瓜取そり不す走そう里りあるひる素その扱くへかど素そ末まにー又また素そのわてわひひふふじじなど
ああるるかかうう小せ殊じゆ畧りやくのの側かた方かたして不ふ作さくなれを幸さい北きたより我わが軍ぐんの懸かへへれれ扱くと
心こけけるるとと故こ小せ虫ちゆうのの勢せいくく存ぞんのの半はんのの蚕かいののもももも取とりりはは終しゆうくく心こけけるると
神かみ蚕かい種しゆう日にち蚕かい小せ前ぜんのの用ようををきき幸さい附つ前ぜんとと防ぼうぐぐ幸さい

蚕種かいしゆうとと玉たまてて前ぜんのの好こう扱くなりなり前ぜんにに通とほぬぬ言ことれれ所ところへへけけりり並ならびび一いち六ろく七しち月げつより
そそのの令れいををとと別べつしてして風かぜ小せ前ぜんのの種しゆうをを新あらたままりりてて三さん十じゅう日にち種しゆうをを新あらたままりり
風かぜ小せけけるるもも何いかにりり家いえ内うち小せ前ぜんままくく来きははかかいい道みち小せ前ぜんおおやや玉たまととすす
ははもも並ならびび前ぜんままりりとと又また夏なつのの比ひにに量りやう紙し小せ色しきとと是こゝとと前ぜんののかからら
所ところ小せ並ならびび恐おそれれくく本ほんににととりり又また山やま小せむむらら本ほんととりり素そ糸いとにに針はりのの有あるる本ほん何いかにり
是こゝもも所ところ小せよりりてて是こゝとと道みち小せ前ぜんももよよりりああかかののどどくく一いちとともも止とどめめぬぬ附つとと前ぜんまま
本ほんのの名な遠とほ有ありり一いち是こゝとと道みち小せ前ぜんのの好こう扱くとと食くひひ小せ前ぜん並ならびび一いち

齊民要術云

冬十二月ふゆ前ぜんのの尾おしをを切きりり生なまむむぬぬ年とし正月げつ元げん朝てい日にちの出いででるる素そ小せ其その家いえ
主しゆ彼か前ぜんのの尾おしをを切きりり一いち附つ勅しやく屋おく吏し制せい断たん前ぜん虫ちゆうはは呪のろ文ぶんをを唱なまへへてて家いえ内うちと
白しろねねをを前ぜんままりりとと三さん時じ切きりり前ぜんままりりとと三さん時じ切きりり前ぜんままりりとと

淮南萬畢術云

狐きつねのの皮かわ眼まなこをを狸ねこのの陰かげ囊ふくろにに入いれれてて前ぜんにに穴あなととふふららげげはは前ぜん外がわへへり
糸いとをを前ぜんままりりとと一いち日にちにに一いち回かいをを前ぜんままりりとと

蚕小毒忌何由幸

第一だいたたむむここのの扱く桂けいのの糞ふんははここのの素そ山さん椒かのの匂におひひ仲なつ氣き培つち氣き漆しのの木き胡こ桃たうのの木き
松まつのの木き北きた近ちか所ところ小せああるる素そ牛うし馬まのの糞ふん付つくく素そううるるをを焼やく半はん熱ねつしてして懸かきき
臭かいいのの物もの焼やくべべりり皮かわ或あるとと門かど前ぜんににとと懸かきき臭かいいのの魚いさな肉にく又また糞ふんかかどど扱くむむ

まご戸を穿べ〜又番不浄まけとく赤色小なり又いす身赤くなり或る
俄ふらけて死する事有は附と急ご桃の糸と火小物とてより〜又
甲辰色は赤とされ糸と掃りひけをり〜知〜か〜糸にひて喰ととも
〜又極との酒と糸に喰ひ喰を固も有り〜知〜糸にひて喰ととも

又云番幼とる事此時長井式歩斗横を歩斗此虫多く出来番と喰ひ糸を
半あり 籠と虫ととも又け虫多くわく附と川魚又と海魚の糞とと葉
の苞小入番の傍るる事此所小けり〜被思ひ〜臭と匂ひ小集り
苞へたりふなり其附静小苞と取をれ形造小持り虫と掛ひ又元の
所へけり虫葉茂も取〜元来けり〜と事此年小少〜暖氣成
年小多〜是と番此尻がた〜子抜あねを多く〜なり例年番出る
前小家内を能く掃除ま〜け虫極の中杯のぶ〜より生は〜なり

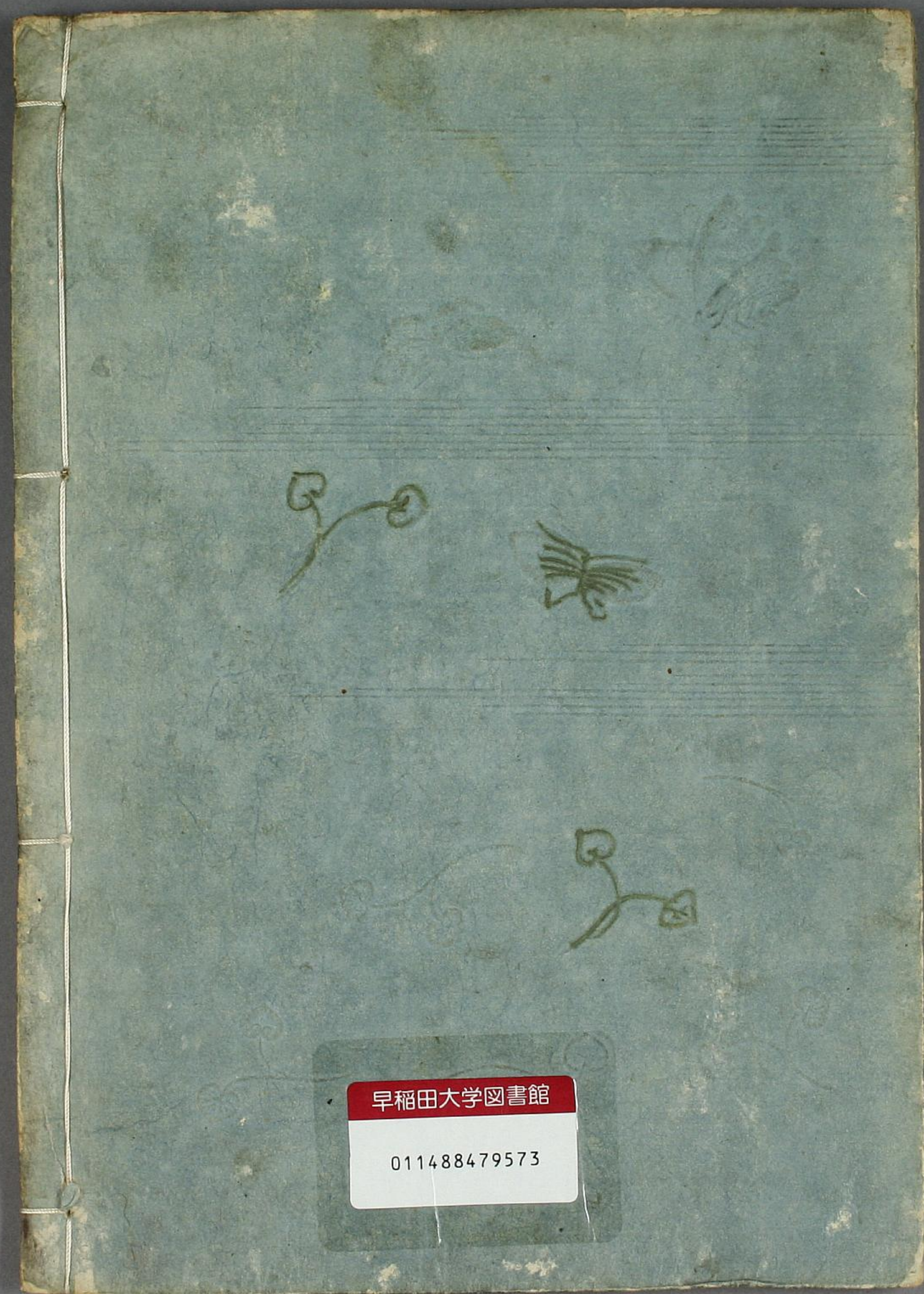
番家作仕振の事 附 庭敷若愚此事

家作と才一異若濕を除ふ振小字く他〜空小風抜の穴又と窓多く
東面小に戸と取庭〜南と少れ窓をあけ何と〜戸の明穿自由小を
庭〜日の照りさむと甚悪〜元来秋分し四方此陽氣さ醒め朝あみ
過すまでと玉極涼〜さりのさり豆丸あ前あより暖あなりハあ付分あより
蒸あくやとめくかり雨うけ乃家なりとは別〜夕日の火氣あ小番と
〜先ちひ小括する半回〜ある半よりは家後と取此方樹本と植
て夕日の火氣をふせく庭〜又窓れとと番小屏風など引糸〜又
と紙帳ととり杯〜格別風の入を止先むさく〜せほめくた〜悪〜
陽守と豆萩時〜み〜磐石かり程を家内何時も日振あり〜と書
番と人〜想〜て番小取〜は其道以業とするふと一公の〜と〜

肝かん要えうより表ひょうと苗ひょう代だい風ふう空くうりて時ときふより小せう風ふう吹ふ別べつくををれ事こと
 折おくああく一一蚕さんも幼せうき時ときと空くうさみ痛いたむ一一又またほほれ一一神かん蚕さんの
 庭てい起おり性せい熱ねつく夜や庭てい一一又また空くうさみ痛いたむる程ほどのほほれ蚕さんと後のち
 身み病びやうと志し一一身み一一我わが家かに陽やう氣き加か減げんと空くうさみ事こと至いたりて大だい切せつの事こと

養蠶秘録上之巻終

養蠶上之巻終



早稲田大学図書館

011488479573